

大宮見沼

よみさんぽ

第21号

特集

人が人を呼ぶ地域の居場所
「てらこや新都心」

特集

人が人を呼ぶ地域の居場所 「てらこや新都心」

高層ビルやショッピングモールの立ち並ぶさいたま新都心駅から10分ほど歩くと、都会の風景を背にして、不思議なくらい静かな空間が現れます。ゆったりとした広い敷地に建つ築50年ほどの木造の民家が「てらこや新都心」です。

道に面した和風でシンプルな外観のカフェと、その奥に小さな池のある庭と懐かしい雰囲気の玄関が見えます。

この「てらこや新都心」は2014（平成26）年4月のオープン以来、子どもから大人まで多くの人が集う地域の居場所として親しまれています。今回は、運営スタッフの大場明美さん、佐藤裕子さん、長谷川俊博さんの3人にお話を伺いました。



入口の看板

空き家を地域の居場所に

この家で生まれ育った大場明美さんは、父親の遺してくれた家が空き家になり、ただ朽ちていくのを見ていられなかったと言います。



左から長谷川俊博さん、大場明美さん、佐藤裕子さん 「父は自治会長なども務め、地域の

人が家に入出入りしているのが日常でした。この家を地域で活かせたらと思ったのは、やっぱり私もそんな血を受け継いでいたのでしょう」

大場さんは、日頃から若いお母さんの行き場所がないと感じていました。そして、子育て中でも自分の得意なことを活かして何かをしたいと思っている女性が地域にはたくさんいることも知っていました。そんな人たちの気軽なチャレンジの場として、まずはこの家をレンタルスペースとして地域に開放することから始めてみました。

同じ頃、佐藤裕子さんは、仲間とともに立ち上げた団体での活動に1つの区切りをつけたところでした。そんな時、知人を介して大場さんと出会います。子どもと大人の居場所づくりをしてみたいと考えていた佐藤さんは、大場さんの想いに共感し、この人とならいつしょにできると直感して、運営スタッフとしてともに活動をスタートすることになります。

その後、もう1人の女性スタッフとともに、子どもたちが安心して楽しめる庭造りを目標にクラウドファンディングで資金を募ったところ、地域の人たちから多くの支援や共感を得ました。そんな中で、実際に何度も足を運び、力仕事も買って出てくれたのが長谷川俊博さんです。女性ばかりのスタッフの中に頼りになる仲間が新たに加わりました。こうして緑がいっぱいの手づくりの庭も完成し、2014年4月に「てらこや新都心」が正式にオープンしました。



庭の完成予想図



現在の庭

「食」でつながる

「てらこや新都心」が大切にしていることの1つに、「食」というテーマがあります。レンタルスペースでの講座後、参加者がいっしょに食事をする機会をつくったところ、自然にコミュニケーションが生まれました。安心安全な「食」を通じた交流の場をつくりたいという思いが膨らみ始めました。



カフェ外観

そして2015（平成27）年秋には建物の一部をリノベーションして、新たに「ギャラリーカフェてらこや新都心」をオープン。カフェは週替わりのオーナーシェフが運営します。料理は得意な大場さんですが、さまざまな役割をこなしながらカフェを1人で切り盛りするのはたいへんです。週替わりにすることで女性のチャレンジを支えると同時に、人が循環することで新たな人間関係も構築できるというアイデアです。

さらに2016（平成28）年に始まった「てらこや食堂」は、みんなでいっしょに食べる喜びを感じる場所です。ここでは若いボランティアや専門の知識をもった病院関係者などの力が発揮されています。提供してもらった食材を無駄にせず、メニューや調理法を工夫して、野菜を中心にした料理をおいしくいただきます。多い時には40人を超える子どもと大人が集まって、賑やかに食卓を囲みます。

集う人の力で変化し、成長する場

今年（2017年）の1月には、絵本や児童書、お母さんが気軽に読める本を中心にした、誰もが利用できる小さな図書室「てらこや文庫」がオープンしました。これも以前からアイデアを温めていたものですが、人の縁がつながって本が好きな仲間が集まり、実現しました。本は地域の人を持ち寄り、ボランティアが整理しています。

また、同じ1月に開催された「餅つきまつり」の催しは、地域とのつながりを大切にしながら、昔ながらの伝統文化を守り、子どもたちに伝えていきたいという思いから開催されました。やどかりの里からも「すてあーず」（見沼区

南中野でリサイクルショップと革製品の製作販売を行う事業所）が参加して、革小物づくりのワークショップで地域の方と交流しました。日本の古い家屋を活かしたこの場所では、日本の伝統文化を伝えることも大切にしています。着物を縫ったり、茶道や生け花なども敷居を低くして、気軽に親しめる場をつくっています。さらに最近では寄席なども始まりました。寄席を企画したのは、今は子育て中の若いお母さんです。学生時代の落語研究会の仲間を引き連れて、熱い思いと抜群の行動力で活躍しています。



玄関には靴がいっぱい

子どもたちの放課後の居場所づくりをテーマにした「子どもラボ」も、てらこやの活動の1つです。子どもたちが自分たちで考えて実行し、協力し合う場から、子どもの自己肯定感を育みます。これまで週に一度だった「こどもラボ」の日を、この春から毎日に拡大し、内容も充実させてリニューアルします。植物を育てたり、暮らしの中の身近な不思議について考える「しぜん不思議の日」、子どもたちの自由な発想での「遊びの日」、その他にも「文字の日」「日本の文化を楽しむ日」「食べ物の日」などプログラムも盛りだくさんです。

「大切なのは、これらの活動を担う1人1人が、チームてらこやとして共感を深めながら、長く継続していくこと。そして、こういう場があることをもっと地域に発信していきたい。子ども食堂やイベントなど入口をたくさん用意して、人が人を呼ぶ場所のような循環をつくりたい。緩やかな展望は持ちながらも、人のご縁で何かが生まれていくのがワクワクしておもしろいです」

代表の大場さんは、そう言って嬉しそうに目を細めます。

（記 山田 玲子）

一般社団法人 てらこや新都心
さいたま市大宮区北袋町1-285
<http://terakoya-labo.org/>

さいたまの匠

人々のよりどころを守り続けて

小山 正久さん（さいたま市見沼区）



右から小山正久さん、妻の松子さん

氏子総出で新年の準備

12月30日、中山神社を訪れると、既に氏子さんたちが集まり、境内の地ならしを始めていました。照明の取り付け、駐車場の整備、そして鳥居にしめ縄を付け替えるのも氏子さんたちの手で行われます。

運ばれた藁の端を縛り、木に括って、数人がかりで藁を編み込んでいきます。息を合わせてギュッと締め付ける、かなりの力仕事です。

「もう少し藁を増やしたほうがいいかな」「こうやって『足』を出すんだよ」……そうアドバイスするのは、小山正久さん。小山さんと初めてお会いしたのは、片柳地区社会福祉協議会、地域包括支援センター敬寿園、やどかりの里のエンジュ（見沼区で高齢者へのお弁当宅配事業を行う）で共催した、親子でしめ飾りを作ろうという企画に、講師としてお招きした時でした。小山さんは、しめ縄作りの名人であり、長く中山神社を守り続けてきました。

ご先祖は中山神社の初代神主

中川のご自宅で、奥様の松子さんを交えてお話を伺いました。ご先祖様から辿ると、数百年前からこちらで代々暮らししてきたそうです。小山家の墓石の筆頭には、奇しくも小山さんと同名の「正久」とあり、その方が中山神社の初代の神主だったとのこと。以来、小山家は代々中山神社の祭事を引き継いできました。



藁を編み込むのは力仕事

神社を守る暮らし

小山家には、6畳くらいの部屋に神棚などがあり「家の中にも神社があった」そうで、1月1日に行われる歳旦祭の他、獅子祭や新嘗祭など年6回の行事にも、幼い頃から関わってきました。

神社のしめ縄は、通常の縄の編み方とは逆で、子ども心に難しいなあ、と思っていたそうです。しめ縄に使う藁は、柔らかいもち米の藁で、刈った後は、緑色を残すために陰干しします。さらに、使う前に藁をドラム缶で茹でて、編み易くします。

小山さんは成人後も平日の休みがある消防署に勤め、神社に係る仕事に携わり、農業も続けてきました。

人々のよりどころに

五穀豊穡を願い、収穫に感謝し、^{ねぎら}祝い合い、祝う……農家にとって神社は頼りにするところで、人々の暮らしに密接に関わってきました。

「人間、いざという時の『神頼み』というように、何かそういうものがあるんじゃないかな」という小山さん。「神社にそれとなく集っておしゃべりしたりしている。人は1人では生きていけないから、集ったり、心のよりどころであるといい」

年末年始には、3,000人もの参拝者が訪れます。恒例の甘酒の振る舞いは、寒い中お参りに来る人たちにと、氏子さんたちの手で始められました。自然とともに生き、支え合って暮らす営みの中で、地域の人たちの「よりどころ」が守られています。

（記 永瀬恵美子）



中山神社

さいたま市見沼区中川 143
（社務所）TEL 048-686-3567

俗世と境内の結界に立つ鳥居。雲に見立てたしめ縄の足を出して邪気を祓う。紙垂は雷を表す。

あの街 この街 俊一郎が行く・15

「厳寒、そして遅れてくる春」

過ぎていく春と私

こんにちは！ 文章のテーマでいつも苦勞するのは、季節感かもしれません。見たとき、書いたとき、読まれるとき、この3段階を経ていく間、季節はとどまることを知りません。特に春は特別です。花々の盛りは刻々と変化して、二度と見ることのない風景を展開します。そして一度きりの春はまたしても過ぎていき、特別なものを逃したような苦さだけが残ります。

冬の北国へ

この冬、北海道の網走を訪れました。いちばんの目的は流氷。しかし心配は寒さです。現地は川や湖が凍り、流氷が鳴くような気候。手元にある中で、最大限に防寒できる服を考えながら出発の日を待ちました。

着いてみると、現地は想像していたよりも暖かい。海が近い網走は、海流の影響で内陸部より冷え込みが緩やかな場所のようです。今年は降雪が多く、市内の歩道には自分の背丈を越すような高さの雪が積まれていました。昼間でしたが、緯度の高さのせい、常に夕暮れのような風景に見えます。本当の夕方がやってくると、全ての風景を青く染めるような雪国独特の夕暮れでした。



流氷の海

2日目の朝は快晴でした。早速、念願の流氷観光船に乗り込みます。海の季節の変化は遅れてくるのか、陸に比べて厳寒の時期を迎えても流氷はまだ沖のほうにあります。港を離れてしばらくは深い色をした北の海。そこに、だんだんとシャーベットのような氷が見えてきます。はす葉氷と言うようです。氷が張るくらいの穏やかな海を15分ほど行くと、わ

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）を複数行う。（写真 新 良太）



ずかな衝撃とともに船は流水の中へ入っていきます。いよいよ厚い氷に出くわしたとき、ドーンという音とともに船が動揺し、わずかに動きが止まった気がしました。船はもがくように動きながら氷を割り始めて、また進んでいきます。

豊穡の海

流水と船の格闘にも慣れ始めた頃、目の前を黒い影が過ぎていきました。オオワシです。流水という栄養分の塊は、さまざまな生物を伴って流れてきます。ロシアの大河の作用による塩分濃度の低い海水が凍ったものが流水だと言われていて、陸地の栄養が流れ込んで凍ったものなので、流水が溶ける春には多量の植物プランクトンが発生し、食物連鎖で多くの生き物がやってくるのです。

1,000キロ以上も彼方から流れて来た目の前の流水にとって、北海道沿岸は最南端に位置するようです。北国と思っていたこの場所から、さらに北にも世界は広がっていて、地球規模の川のように大きな流れの到達点。流水の上を通過して存分に冷やされた風に、まだ知らぬ風景と季節の流れを感じました。

2つの春

宿泊先での夜、現地でボタニカルアートという植物画を描く画家の話聞きました。宿泊先のすぐ近くにはミズバショウの群生地があるなど、身近な場所に希少な野生植物が多く見られるのがこの場所の魅力で、植物の種類も群を抜いて多いそうです。

足早に去っていく春に一斉に花を咲かせる風景を想像します。私にとって身近な春が過ぎたら訪れてみたい、これからやってくるもう1つの春です。



「里っこまつり」開催

地域の中で交流できる機会を

やどかりの里には、精神障害のある人たちの憩いの場としての機能をもつ、地域活動支援センター（以下、活動支援センター）が3か所（大宮区・見沼区・浦和区）あります。今回は活動支援センター合同で行った「里っこまつり」をご紹介します。

地域交流のきっかけづくりに

やどかりの里の3か所の地域活動支援センターでは、地域の皆さんと交流ができるような、何か楽しい機会をつくれなかと考えていました。そこで企画したのが「里っこまつり」です。まったく初めての試みでした。どうしたら楽しい交流の機会になるのだろうか……と、かかわる皆さんと思いを巡らせながら構想を練り、大宮区天沼町にある喫茶ルポーズにて、1月30日に開催しました。

「阿佐美やさん」×「やどかり農園」＝ほっこりあたたか笑顔が広がる

寒い時期なので、地域の方にあたたかいものを振舞いたいと考え、協力いただいたのは、焼き芋の移動販売をしている人気の「いも子の焼き芋 阿佐美や」さん（詳細は12ページ）。こだわりのさつまいもを専用の壺でじっくり焼き、埼玉県内の公園やイベントなどで販売しています。今回は、見沼区で障害のある人とともに無肥料自然栽培の野菜づくりに取り組んでいる「やどかり農園」で育てたさつまいもを焼いていただき、販売するというコラボレーションが実現しました。壺でじっくりと時間をかけて焼いたさつまいもは、甘くてほっかほか！ 大好評でした。

趣味や特技を活かし合える交流の場づくり

会場となったルポーズの店内では、喫茶店営業の傍らで、お気に入りの本やCDを持ち寄り交換する「たからもの交換会」と「似顔絵コーナー」「手づくり品販売コーナー」を設けました。メンバー（やどかりの里を利用している精神障害のある人）と職員が、自分の特技やできることを活かして企画を練り、準備を重ね、商品づくりに励みました。当日を迎えるまでは、果たしてお客さん

に来てもらえるだろうか……という不安もよぎりました。しかし、予想以上にたくさんの方にお越しいただき、にぎやかで笑顔あふれるひとときとなりました。何より、地域の方たちが呼びかけに応じてくれ、ゆるやかに交流ができたことに感動し、可能性が広がる思いがしました。

いつも近くで私たちの活動を見守ってくださっているご近所の方は、今回の里っこまつりのチラシを見て、友人を誘って足を運んでくれました。「高齢なのでたいへんな人の気持ちが身に染みてわかる」その方は、幼い頃から両親に「人を恵む」ことの大切さを教えられて育ったそうです。「何か自分にできることをしたかった。喜んでもらえるとうすっきりする」と思いを語ってくださいました。こういった地域の方の存在に私たちも支えられていると感じ、心があたたかくなります。

人と人とのつながりを大切にしたい

「住み慣れた地域で安心して暮らし続けたい」と願う人は、やどかりの里にも多くいます。しかし、大きな災害など、地域生活の安定を揺るがすような出来事が現実にはあります。今回の企画には、「地域の中の、ちょっとしたつながりがあることが、安心して暮らすことにつながっていくはず」という思いを込めました。そして、地域のさまざまな方と出会える場となり、この地域のことを考えていく上での第一歩となったのではないかと思います。今後どんなことができるだろうか、と少しわくわくしながら、活動支援センターの人と話し合いをしているところです。たくさんの方とのつながりを大切にしながら、地域の中でどのようなことができるのかを考えていきたいと思います。（記 金子 紗也）



焼き芋からつながった 夢を追いかけて

浅見 洋子さん

(いも子のやきいも・かき氷「阿佐美や」店主)



「阿佐美や」の「いも子」こと浅見洋子さんは、毎年11月から3月の間、地元の戸田市、さいたま市を中心にリヤカーでの壺焼き、軽トラックでの石焼きによる焼き芋を、路上や公園、各種イベントなどで販売しています。自身の足で訪ね歩いて選んだこだわりの無農薬の芋を、1つ1つ丁寧にじっくりと焼いたほかほかのお芋はどこに行っても好評で、あっという間に売り切れてしまうことも多いとか。そして人気の理由は「いも子」さんの人柄にもありそうです。そんな「いも子」さんにお話をお聞きました。

そうだ！ 焼き芋屋さんになろう

十数年前、移動販売のフードビジネスに興味を持ち、職業訓練校で学んでいた「いも子」さん。その頃立ち寄った古本屋でふと目に留まったのが「焼き芋屋」でした。これだ！

と思い準備をはじめ、2005（平成17）年に戸田市で開業。それから現在に至るまでは、さまざまな苦労があったそうです。

当初は焼き芋用の壺をリヤカーに積んで、自宅からリヤカーを引いて行ける範囲の営業からスタート。しかし、最初買った壺が粗悪品でうまく焼けず、仕方なく中に石を敷いて石焼き芋として売っていた時期もありました。また、風の強い日に不安定なりヤカーで移動したために、芋が壺の下の方に落ちてしまい、販売する場所に到着しても芋が焼けていないことも。たくさんの失敗や試行錯誤を繰り返しながら、美味しく焼ける方法を見つけ出していきました。

認められたかった自分から、楽しむ自分へ

技術的においしい焼き芋が焼けるようになったこと以外に、「いも子」

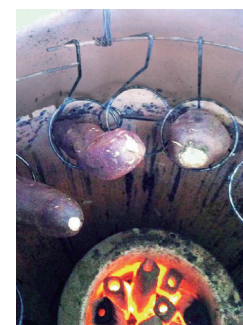
さんの中で大きな変化がありました。それは、焼き芋の仕事を自分自身が楽しめるようになったこと。「最初の頃は、焼き芋屋をすることでお客さんや周りの人に認められたい、うまくやりたいという思いが強く、自分がこうしたいというよりも、周りからの期待に応えようとしていました。少し無理をしても販売に出かけたり、美味しくないとと言われるととても落ち込んでいた」そうです。しかし次第に「自分が好きなことを気持ちよくやりたいな」と思うようになり、子どもも生まれて長時間の営業が難しかったこともあって、「自分がやりたいときに、短い時間でもやっていこう」という気持ちに変化していったと話してくれました。

芋づる式につながる縁に支えられて

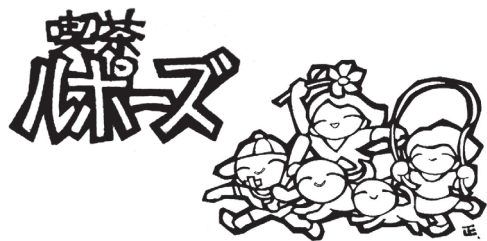
さらに、さまざまな人との出会いを通じて焼き芋屋として伝えたいことも見えてきました。それは「農業を身近なものにしたい、そして焼き芋屋さんがある街の風景を残したい」ということ。現在の「いも子」さんの活動は、焼き芋を売ることだけにとどまりません。畑を借りて芋を育て、収穫し、焼き芋にして食べる「芋づるプロジェクト」や、自らが経験して得た焼き芋販売の知識や

ノウハウを伝えるお話会や講座などを開催したり、やどかりの里の開いた里っこまつり（p10～11）にも出店し、精神障害のある仲間との交流も深めています。夏になればナチュラルシロップの人力発電かき氷の販売もしています。

焼き芋が売切れるとすぐに暖簾のれんをおろす「いも子」さん。「焼き芋を売っていると思って買いに来る子がいたらかわいそうだからね」と。そんな「いも子」さんの周りでは、大人も子どもも笑顔になってしまうようです。目印はかわいい「いも子」のマスコットキャラクター。まちのどこかに阿佐美やさんを探してみませんか。（記 尾形 志保）



出店の予定・イベントのおしらせは阿佐美やホームページ（<https://www.asamiya.org/>）をご覧ください。



営業時間 月～金 10.00-17.00
さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

☆作品展示したい方
☆雑貨販売したい方
☆貸しスペースあります
詳細は ☎ 048-657-0202

天沼1丁目 スーパーバリュー
大宮駅 喫茶レポーズ ○大宮天沼店

あゆみ舎が使用済み PC の回収を始めました！

不要になった PC・携帯電話・スマホを無料でご自宅へ引き取りに伺います。持ち込みも大歓迎です。データ消去作業は株式会社アンカーネットワークサービス (<http://www.anchor-net.co.jp/>) が責任をもって消去いたします。

問い合わせ先 あゆみ舎

〒 330-0804 さいたま市大宮区堀の内町 1-37-103 TEL 048-648-2555
受付時間 月～金 (祝祭日は除く) 9:00-18:00

埼玉県産小麦粉を使用 手づくりまんじゅう

まごころ



さいたま市中央区本町東 5-9-7
Tel. 048-857-2783 Fax. 048-857-2769

おいしく食べて
健やかに

栄養バランスのとれた
お弁当で食生活を支えます



昼食 1食 550円

月～金、1食からお届けします！

* おかゆや刻み食も対応します
* ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL 686-7875

<受付> 月～金 (祝日を除く) 8:30～18:00

インフォメーションコーナーの
掲載広告を募集しています！

1マス (64mm * 46mm) 5,000円

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひご賞味ください！

つばさ共同作業所・そめや共同作業所

いちず
とうふ屋 一豆
TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、
国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を
100%使用しています。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる
“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。



きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心に
こだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。
(一部商品を除く)
この道30年の職人とともに手がけるパンは、
少し懐かしい味と香りがします。

きりしき共同作業所

きりしきのパン

TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942
さいたま市中央区円阿弥1-3-15
鴻沼福祉会館内

そめや共同作業所

弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257
さいたま市見沼区染谷2-145

弁当屋いちずのお弁当は、忙しい毎日
過ごす方たちに1食でもバランスの良い
食事をしていただきたいと、
副菜や小さなおかずにも野菜をたっぷり
使って作っています。



鴻沼福祉会から読者の皆様へ

鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、
資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な
仕事を受注しています。
働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて
新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

障害のある人たちの就労支援、生活支援、
相談支援のスタッフを募集しています！
お問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

- 本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL: 048-854-6890 FAX: 048-856-0313
- 《はたらく》●つばさ共同作業所 (中央区) ●あざみ共同作業所 (見沼区) ●そめや共同作業所 (見沼区) ●きりしき共同作業所 (中央区)
- さいたま障害者労働センター (桶川市)
- 《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえてホーム ●かりんホーム ●よつぱいイツ
- なつめホーム (以上、中央区) ●のぞみホーム (見沼区)
- 《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢 (以上、中央区)
- 見沼区障害者生活支援センター来人 (見沼区)

大宮見沼 よみさんぼ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作。全国各地での写真展開催のほか、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。また、2016年5月より国内就航を開始したANAの復興支援「東北 FLOWER JET」の機体を福島や東北の花々でデザイン。全国に明るさを届けたいと活動を続けている。野口勝宏オフィシャルサイト <http://noguchi.photo>

表紙：ポピー

70年代のアイドルが歌っていた「ひなげしの花」が一体どんな花なのか、当時はインターネットもなかったので調べるすべもなく、ずっとマーガレットのような花だと思い込んでいました。ひなげしは虞美人草くびじんそうとも呼ばれますが、ポピーの中でもシャーレーポピーという園芸種が同じものに当たるそうです。この花の厳密な種類はわからないものの、こんな花が丘の上で風に揺れていたら気持ちよさそうだなあと単純に楽しめます。向きを変えると、光を求めておもしろいぐらい曲がるので自由に遊んでもらいました。

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぼ 第21号

発行 2017年4月（春号）

編集 「大宮見沼よみさんぼ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぼ」を創刊いたしました。

「大宮見沼よみさんぼ」編集委員一同